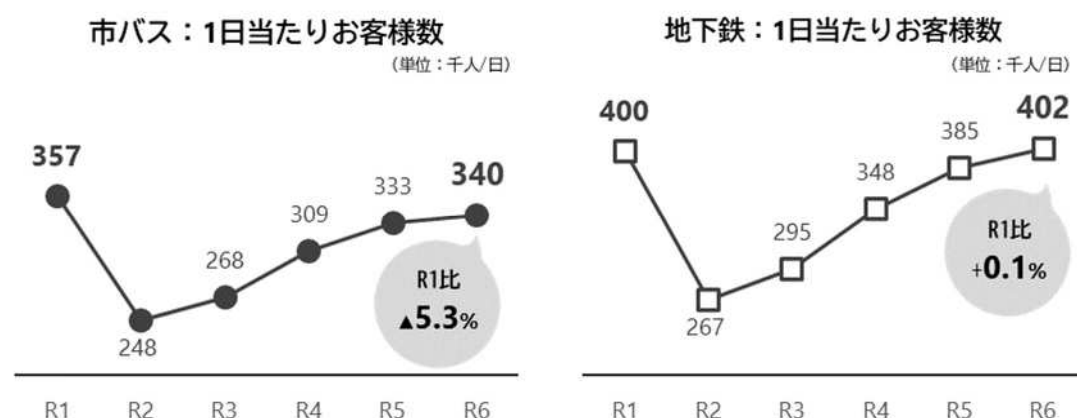


交通局の経営状況等

1 市バス・地下鉄の御利用状況（令和6年度）

- お客様数は、市バス、地下鉄とも、定期（通勤）や定期外（「現金・ICカード利用」や「地下鉄・バス1日券」等）が増加し、年間を通じたお客様数は前年度を上回った
- 市バスは、34万人で令和5年度比では7千人（+2.0%）の増となったが、コロナ禍前の令和元年度比では▲5.3%
- 地下鉄は、40万2千人で令和5年度比では1万7千人（+4.3%）の増となり、コロナ禍前の令和元年度比でも0.1%増で過去最高



（参考）市バス事業

1/4 の黒字系統（18 系統）が、3/4 の赤字系統（56 系統）を支えている状況(※)

※ 令和5年度決算時点。なお、コロナ禍前の令和元年度でも1/4が黒字系統（21系統）、3/4が赤字系統（63系統）

（参考）地下鉄事業

丸太町駅、五条駅、九条駅、十条駅の利用が増。コロナ禍前を上回る水準
一方で、その他の駅の利用回復は比較的鈍い傾向

2 市バス・地下鉄の財政状況（令和 6 年度）

- 運賃収入は、お客様数の回復や平均乗車単価の改善の効果もあり、両事業とも前年度及びコロナ禍前の令和元年度を上回った。これにより担い手確保に向けた処遇改善のための人件費や物価の高騰による支出が増加するなか、両事業とも 2 年連続で黒字を確保
- 市バスは、10 億円の黒字を確保したが、国や一般会計からの約 7 億円の財政支援を含んだものであり、黒字額は前年度から 2 億円減少
- 地下鉄は、お客様数の回復や電気料金等の落ち着きもあり、前年度を上回る 26 億円の黒字を確保。しかし、いまだ 3 千億円にのぼる多額の企業債残高を抱え、厳しい経営状況

決算の主要数値：市バス

	R5 年度 A	R6 年度 B	増▲減 B-A
在籍車両数	810 両	810 両	-
走行キロ数（1 日平均）	81.3 千 km	81.7 千 km	0.4 千 km
経常損益	12 億円	10 億円	▲2 億円
▲累積欠損金	▲10 億円	▲0.3 億円	10 億円
資金剰余額	13 億円	30 億円	17 億円
年度末企業債残高	83 億円	90 億円	7 億円

決算の主要数値：地下鉄

	R5 年度 A	R6 年度 B	増▲減 B-A
在籍車両数	222 両 [37 編成]	222 両 [37 編成]	-
走行キロ数（1 日平均）	55.6 千 km	55.7 千 km	0.1 千 km
経常損益	23 億円	26 億円	3 億円
▲累積欠損金	▲3,102 億円	▲3,076 億円	26 億円
▲累積資金不足	▲420 億円	▲438 億円	▲18 億円
年度末企業債残高	3,251 億円	3,131 億円	▲120 億円

3 交通局の取組

- 厳しい経営状況のなかでも、令和6年度は、「担い手不足への対応」として職員の処遇や職場環境の更なる改善を図る取組、観光特急バスの運行開始や地下鉄をはじめとした鉄道を活かした移動経路の分散化などの「市バスの混雑対策」の取組の2つを喫緊の重要課題として積極的に展開
- また、交通事業者としての最大の責務である輸送の安全確保を最優先に、以下の5点を主要事項として位置付け、着実に実施
 - ① 安全・安心の取組
 - ② 担い手不足への対応
 - ③ 利便性・快適性の向上
 - ④ 明確な理念に基づく“なりふり構わない経営改善”の取組
 - ⑤ 社会課題解決への貢献等
- 一人でも多くのお客様に御利用いただくため『地下鉄・バス「MOTTO!」利用促進本部』による全庁を挙げた増客の取組をはじめ、駅ナカビジネスや広告料収入など更なる増収に向けた取組を展開
- 「突き抜ける世界都市 京都」の実現に向け、令和9年度における市バス等の「市民優先価格」の導入に向けた検討をはじめ、「新京都戦略」に掲げた駅トイレのアップグレードプロジェクトに着手するなど、持続可能で安全かつ満足度の高い市バス・地下鉄事業に向けて着実に前進



令和7年度も引き続き、「担い手不足への対応」と「市バスの混雑対策」を重要課題に位置付け、「突き抜ける世界都市 京都」の実現に寄与する持続可能で安全かつ満足度の高い市バス・地下鉄を目指し、様々な取組を積極的に展開